

児童健全育成賞（数納賞）佳作

「地域に潤いの風を 市民に幸せの香りを  
児童館から心の世界を広げたい」

～環境問題を視点到連携協働の『希望の学舎』『子どもの学舎』づくり～

長野県 松本市

松本市社会福祉協議会あがた児童館 館長 山岸紀子

ステージ1 児童館で働いて、  
大切にしてきたこと

私が、松本市内の児童館で厚生員として働き始めたのが、平成4年でした。今年で23年目を迎えます。そこでは、放課後の子どもたちの安全を第一に、子どもだけでなく保護者とも信頼関係を築き、さらに地域とのつながりを基盤に、学校、家庭、地域住民と連携して心豊かな子どもを育てる児童館を作りたいと考えて働いてきました。

児童館では、館内での遊びや運動のほかに、地道ではありますが館外で花を育てたり、ごみ拾いもしてきました。

平成16年、今から10年前のことです。2004年度のノーベル平和賞の発表を新聞で見ました。受賞者は、アフリカのケニアで環境活動家として活躍していたワンガリ・マータイ女史でした。「グリーンベルト運動」を創設して、多くの女性たちと共にアフリカ各地に植林活動を展開し、約3000万本を植樹して環境問題に取り組んだものでした。まさに、立ち上がった“一人”は、世界を変える力を持っていることを知りました。

この運動は、“砂漠化は、北から広がってくるのではなく、我々の裏庭から始まる”を合い言葉に、女性たちが中心となって、母親が子どもたちと一緒に苗木を植えるなどして、子ども

たちも苗木の世話をし、誰が植えた苗木が最も生長しているかを競い合いながら、苗木への愛情を深めているのでした。

こうした具体的な体験活動を通じて、自分の地域の問題を考え地球環境問題に対する意識を高めていくことは意味のあることだと感じ、私自身が児童館で今まで取り組んできた、花を育てたりごみを拾うことも小さな環境問題としての活動であったと思うようになりました。

翌年の2005年から国連で、「持続可能な開発のための10年」がスタートし、本年はそのゴールとして名古屋市や岡山市で記念の会議等が開催されました。

その「持続可能な開発のための10年」では、環境教育や平和教育が活動計画に示され、次代を担う初等教育から高等教育に至るまで、その教育内容を高めていく努力が求められ、また、それは、家庭や職場、地域のコミュニティなど、あらゆる場所や機会を通じて実践されなければならないものとして示されていました。

私は、微力ではありますが、ワンガリ・マータイ女史の「グリーンベルト運動」や国連のユネスコが求めている「身近な環境教育」を僅かでもいいから、児童館の子どもたちを中心に組み込んでいきたいと希望をもつようになりました。

## ステージ2 様々な連携に発展

### (1) 現在の子どもたち

平成24年4月、私は松本市内にあるあがた児童館の館長として勤務を始めました。

しかし、私が求めている希望とはかけ離れていました。児童館の周辺は、雑草が生い茂り、花壇もなく、地域住民との関わりもなく、さらには、子どもたちは、館内での遊びを中心した活動だけでした。

考えてみると、青少年期というのは、本来は様々な興味や関心をもち、将来に向かって大きな希望や目標を掲げ、そこに向かって全力で取り組み、時には失敗や挫折を繰り返しながらも、情熱と誠実を大切にして様々な挑戦をする時期であると思います。

残念にも、現代の青少年をみると、学習意欲や勤労意欲を持ってない青少年の増加傾向があり、試行錯誤に取り組む意欲の減少や自己肯定感の低さも目立ちます。また、自己中心的で抑制心に欠け、あいさつや礼儀を始めとした社会の規範意識の低下もあります。さらに、価値観の変化と多様性から発達段階における心と体のバランスの偏重があり、将来の職業や生きがいに対する展望の欠如もあります。

その背景には、家庭教育や地域の教育力の低下があり、自然体験、社会体験、生活体験の減少もあり、様々な場面における人間関係の希薄化があると考えられます。

やはり、勤務した児童館の子どもたちも同様でした。そこで私は、館長としてできることは何かを考えたとき、子どもの豊かな心を育てるには、まずは環境教育を基盤にして、幅広い人間関係を築くために多くの団体などと連携をして様々な体験活動をするのだと決めました。

### (2) 『清掃活動』を中心にした中学校との連携

幸いにも、本児童館は、10年程前から近隣の中学校と連携をして、生徒たちが進んで児童館の窓ふきや床掃除をしてくれていました。

そこで、この清掃活動を単に中学生だけでな

く子どもたちと一緒にできるように考えました。学校から児童館に来た子どもたちは、中学生が一生懸命に清掃する姿を見て、「中学生のお兄さんやお姉さんと一緒にきれいに掃除をしましょう。」と私が呼びかけるとすぐに始めてくれました。

自分たちの児童館をきれいにすることの大切さを、中学生が教えてくれたのです。そこに、児童館の小学生も一緒になって清掃することにより、初めての体験から何か進んで清掃することが喜びに変わったようにさえみえてきました。

中学生は、館の外に出て、周辺に雑草が生い茂った様子を目の当たりにして、今度は、草取りまで始めてくれました。すると、子どもたちも中学生を追いかけるようにして外に出て、草取りを始めたのでした。私が呼びかけるよりも、子どもたちは中学生の姿を見て同じように草取りをしたかったのです。大人から子どもへの上下の指示よりも、中学生と小学生という、いわば子ども同士の横の関係の方が活動はしやすく取り組みもやりやすいことに気付きました。子どもたちは、自然のうちに中学生と会話がはずみ、「この草がとれない」と子どもが言うと、中学生は、「いい、草の根っこを持って引っ張ると直ぐ取れるよ。」とコミュニケーションも徐々に取れてきたのでした。また、この児童館で過ごしたある中学生は、「感謝の気持ちを持ってきれいにしたい。」と決意をしたり、この児童館が平成27年度には新しく改築されることを思い、「施設が新しくなってもこの活動を後輩に引き継ぎたい。」と感想を述べてくれました。中学校の校長先生は、「小学生と一緒に清掃をすることを通じて、中学生の心も磨かれるのです。毎年こうして児童館で清掃をやらせていただき感謝です。」との言葉をいただきました。

こうして中学生が児童館の環境美化に関心をもってくれ、児童館と中学生との連携ができました。ある小学生は、「私も、中学生になったら児童館にお掃除に来るからね。」と言ってくれたのでした。

### (3) 『花壇づくり』で、保育園と小学校と連携

館内外の環境整備が一段落をし、子どもたちの目や行動が児童館の外に向けられた始めたとき、私は、子どもたちと一緒に花でいっぱいの花壇づくりを計画しました。

まずは、子どもが通う小学校を訪問して、校長先生にその願いを伝えました。すると、校長先生は、「うちの学校で、マリーゴールドやサルビアの苗がありますから、どうぞ育ててください。」と言ってくれたのです。

平成24年6月、早速に、小学校の先生がその苗を運んで来てくれました。子どもたちや職員と一緒にその苗を植えました。作業を終えた子どもたちは、弾んだ心から「早く大きくなってきれいな花が咲くといいね。」と感想を漏らしました。今まで児童館の玄関前には何もなかった殺風景な姿からは想像もできないくらい緑に囲まれた児童館になり始めていきました。

夏に近づくと、マリーゴールドやサルビアは次第に生長し黄色や赤色、紫の花をつけるようになり、今まで人通りのなかった児童館前には、近くの公園を散歩する地域住民の方々や、近くのあがたの森を清掃するシルバーの方から、「花壇の花がきれいに咲いていいですね。」「手入れが行き届いていて花も落ち着いています。」と声をかけてくれるようになりました。

同僚の職員から、「今までは、散歩をする人と会話がなかったけれど、花壇ができたことで地域の方との会話ができるようになりました。」と朝の出来事を報告してくれるようになりました。

私は、小学校とのささやかな連携から、花壇ができたことにより、地域の皆さんに喜んでもらえる児童館になり、そこからコミュニケーションが生まれ、何より児童館に関心を寄せていただくことが嬉しくなりました。

平成25年度になると、花壇を見ていただいた校長先生から、苗だけでなく、花が育ちやすい土壌まで提供してくれ、子どもたちは、毎日児童館にくると、その花を見ながら水やりや草取りまでするようになりました。よく、「花を育

てることは、人を育てること」と言われますが、子どもたちは、この花壇づくりから、花の生長のために水をやったり、雑草を取ることで、豊かな感性や自主性、植物愛護の心や思いやりの心が少しずつ育ったことを感じました。

この年は、朝顔や風船かつらも育て始めました。小学校の校長先生の協力もいただき、朝顔のネット張りまででき、10月には、その咲き誇ったあとの種をきれいな贈答袋に入れて、児童館の子どもが以前に通っていた、近くの保育園にプレゼントもしました。園長先生からは、「種は大切にしています。来年は、親と子どもと一緒に育ててくれると思います。」と言ってくれました。

今年は、この種を児童館の玄関前において行き交う市民の皆さんにも提供することができました。こうして、児童館に来るお迎えの保護者や児童館前を散歩や通行する市民の皆さんにとって、児童館は心のオアシスとなり、地元の信濃毎日新聞は、「花壇は、地域交流の場となった」と報道してくれました。

その結果、平成26年度は、松本市のオープンガーデンに認められ、『まちに潤いの風を、市民に幸せの香りを fromあがた児童館』をキャッチフレーズとして位置付けてきたのです。

### (4) 『菊づくり』を通じて、家庭や地域と連携

連携の輪が広がり始めた頃、小学校の校長先生から「小学校と一緒に菊作りをしてみませんか。」の提案を受けたのです。私は、今まで児童館では一度も経験したことのない菊作りが果たしてできるのかどうか不安もありましたが、子どもの心が育つならと思い、依頼をしました。

育てるには、子どもだけでは無理なので、保護者と一緒にやろうと児童館だよりで募集をしたところ、保護者だけでなく祖父母までが応募されました。早速に地域の菊作り名人を紹介していただき、小学校から提供された菊の鉢に土壌を入れ大事に菊の苗をさしました。小学生と母親の姿、そしておじいちゃんやおばあちゃんのほほえましい姿が見られました。まさに、親

子や三世代の協働による「菊作り」となりました。

この協働とは、協力して働くことを大切にしながら、どちらが上とか下でなく、みんなが一緒になって心を合わせて取り組むことを目指しています。

夏になると、暑さから育ちが悪くなるため、日陰に鉢を移動したり、毎日の水やりも大切な作業となり、学校から帰る子どもたちと一緒に行いました。水やりをする子どもは、「水をやると、きっと菊もうれしいと思っているね。だって、のどが乾いたとき水を飲むとうれしいから。」と自分の心から菊の立場になって表現できる心に成長した姿を私自身がうれしく思えてなりませんでした。

子どもが手入れをしたり、お迎えに来た保護者が手入れをしたり、時には、おじいちゃんやおばあちゃんの手入れをする姿もありました。雨が続き、暑さが上昇して生長に大変な時期もありましたが、黄色や白色など違った菊の花が少しずつ開花する姿を見て、子どもたちの菊に寄せる関心も日増しに大きくなり、保護者や地域住民の皆さんの関心も高まってきました。

やっときれいに大輪となった菊は、11月の第3地区公民館と連携をして、作品展に展示をすることになりました。

当日は、多くの鑑賞者が訪れてくれ、菊作り名人のY先生から、「貴重な協働作品だから、国宝松本城で開催される菊花展に出品したらどうでしょうか。」と提案され、不安と期待が膨らむ中、出品しました。

松本城を訪れた多くの観光客や市民の皆さんから「児童館の小学生が咲かせた菊」として評価をいただき、児童館としては初めて、「松本市教育委員会賞」を受賞することができました。

授賞式では、副市長さんから「国宝松本城の城下町に、日本の伝統文化を子どもと一緒に継承してください。」との言葉もいただきました。この菊作りを通して、日本の伝統文化を、児童館の子どもや保護者、地域住民まで関心を持ち継承することができました。しかし、今年は、

源池小学校が受賞をして本館は残念にもそれができませんでした。

松本城の菊花展をきっかけに、当館の前を散歩する地域住民から、「菊花展、見ましたよ。すごいいね。きれいに咲かせて。」と、益々児童館の子どもへの関わりを深めてくれました。

#### (5) 『ギャラリー 子どもの窓辺』を地域の発信

様々な活動から、子どもたちの心はより豊かに大きくなったことを感じた私は、小学校や中学校と協力をして、その心の内面を絵画を通じて、地域に発信しようと計画をしました。

平成24、25年度は小学校に、26年度は中学校を訪問して、校長先生にその願いを伝えました。両校ともにすぐに協力をしてくれ、早速に児童生徒の絵画を提供していただき、その絵画を児童館の窓辺に飾り、『ギャラリー 子どもの窓辺』と称して、市民の皆さんに絵画の美しさを提供することができました。

市民からは、「心が和みますね」との声が聞かれ、中学校の校長先生からは、「うちの美術部の生徒にとってもやりがいがあり、もっときれいな絵を仕上げようと美術の学習への意欲も高まってきました。」と喜ばれました。

この『ギャラリー 子どもの窓辺』により、今までに見られない幅広い年齢層の市民の姿がありました。絵画に興味を持っている市民が本館を訪れギャラリーを鑑賞してくれるようになったのです。子どもたちも自分の作品を見てくれるうれしさがあり、そこには、心と心が通い合うオアシスを感じました。本館にとっては小さなギャラリーではありますが、市民と子どもたちの憩いの場になったと思います。「来年の絵画の展示が待ち遠しいです。」との市民の声が今も私の心の中にあります。

#### (6) 子ども主体の『夏祭り』で、多くの連携

毎年の恒例行事となっている『夏祭り』は、平成24年8月25日の土曜日、134名が参加をして盛大に開催されました。昨年の反省点に、子どもがお客さん扱いであまり楽しそうではなかった

との声があったので、今年は、出来る限り子どもたちの力を借りて運営をしようと計画しました。当日は、子どもたちが喜んで運営できるように配慮をして、受付も子どもたちであり、子どもたちが制作した工芸品で「お店やごっこ」をしたり、「スーパーボールすくい」では、子どもが店主となってすくい方を教えてくれたりしました。

また、民生委員の方から、地域ボランティアを紹介していただき、ミニS Lの機関車を走らせてくれたり、公民館で依頼してくれた地域住民の「アフリカ太鼓のパフォーマンス」も披露され、保護者の有志は、かき氷まで提供してくれました。

最後の後片付けは、子どもや保護者が一緒になって取り組み、民生委員からも「今年は、準備がよく、片付けも早かったです。」との声もあり、保護者からも「みんなで協力できてよかった。」と反省会で言われました。招待した小中学校の校長先生からも「何と言っても子どもが主体で、楽しくできていいですね。」と褒めていただききました。これも、今まで様々な形で連携をして子どもたちの心が育った成果だと感じました。

### ステージ3 点から線になった連携から、面から円(心の絆)となった『子どもたちの絆』

かつて夏目漱石が明治44年に長野に来て講演をしたことがあります。その時に、「教育とは、単に学校教育だけをいうのではない。家庭教育を含めた社会教育までをいうのである。」との言葉を私は、大切にしてきました。子どもの心を育てるには、学校まかせでなく、私たち児童館の立場で社会教育のなかでも尽力することが肝要であると思います。そこに連携の意味があるのではないかと考えます。

それは、平成18年におよそ60年ぶりに改定された教育基本法の第13条に新たに、「学校、家庭、地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役目と責任を自覚するとともに、相互の

連携及び協力に努めるものとする。」と明示された通りであります。

これまで、環境教育を中心にして様々な連携をしてきました。一口に環境といっても大きなテーマであり、自然や身近な環境問題から取り組むとそこには、人間としても生き方が問われてきます。その根底にあるのが心の育ちであり、その心の醸成には幅広い人間関係や連携が不可欠であることがわかりました。

子どもたちは、これらの連携した活動から、今度は子ども同士による連携を求めていくことを私は感じてきました。

#### (1) 『あがたの森未来サミット』に参加

これは、児童館近くにあるあがたの森周辺の8つの小・中・高校の児童生徒による話し合いと実践を行う組織のことを指します。長野県としても8校の児童生徒が集う組織は初めてのことでであると聞いています。

平成24年に源池小学校の校長先生が、子どもたちに地域の宝は何かを尋ねたところ、逆に、同じ地域にいる子どもたちがあいさつをしないという課題を子どもたち自らを見つけ、それでは、みんなで集まって何かをしようということになり、結成されたのが始まりです。

学期に1回、8つの各学校から代表2～3名が集い、まずは、「地域のためにできること」を計画しました。そのメンバーの一員として児童館から2名が参加したのです。小学校4年生から高校3年生という異年齢集団の中で、子どもたちは切磋琢磨して意見を述べ合います。

そこで、本館から参加した子ども2人から、「児童館の周辺をきれいにしたい」という提案があり、私は、すぐに実行を決めました。

松本市では、平成25年に、「子どもの権利に関する条例」が制定され、子どもにとってやさしいまちづくりを目標に、子どもが安心して生きる権利、豊に育つ権利、自分らしく生きる権利、社会に参加する権利を定めています。その一環として、ありがたいことに本館は、今改築中ですが、平成27年度からは、このあがたの森

未来サミットの8校の小・中・高校生たちがいつでも活動をしたり、話し合ったりすることができる活動拠点となることが決定したのです。

遂に児童館が小学生だけの利用でなく、青少年健全育成の場となったのです。

## (2) 子ども主体の『あがた児童館 クリーンDAY』の実施

子どもたちの心は、そんな願いや希望で少しづつ膨らんでいるようです。だから、「児童館の周辺をきれいにしたい」という提案がすぐに出されたと思います。これも、マータイ女史や国連で進めている身近な環境教育を子どもの立場で考えた取り組みであると思います。

この環境美化活動は、毎月1回午後4時から、全員が館外に出て、「あがた児童館 クリーンDAY」と称して、周辺のごみ拾いや清掃を子どもたちと職員が一緒になって始めました。「今日は、タバコの吸い殻が多いね。」「花火も落ちていたよ。」「枝も危ないから拾おう」等、子どもたちは様々な感想を述べていました。

「子どもたちもよくやっていますね。」と地域住民の方からほめられたり、「広いところで大変ですから、手伝います。」と迎いの保護者や祖父母の方々も声をかけてくださり、自主的に草取り作業をしてくれています。

子どもたちが考えた身近な環境教育の実践である、「あがた児童館 クリーンDAY」を今後も継続して活動ができるように、まだ3年目ですが、地道に実践をしていきたいと考えます。

私たちの松本市は、『学都松本』として、「生きいき活動」を展開しています。それは、①心を磨き、からだをつかおう。②このまちをきれいにしよう。③あなたにあいさつをしよう。の3点を市民をあげて取り組んでいます。この②のまちをきれいにしようを、子どもたちが自主的に決めた活動として心の底流に位置付けていきたいと計画しています。

それは、自分たちが、自分のまちをきれにするんだという責任感と誇りを持たせたいのです。「子どもにやさしいまちづくり」は、子ども

にとって何かしてもらっているという受け身ではなく、地域社会の一員として、やさしいまちを共につくっているという意識を大事にしていきたいからです。そこに子どもたちの心が豊かに育つのではないかと思います。

あのアフリカ全土に広がったグリーンベルト運動も、最初はマータイ女史一人の力でした。同様に、本館の子どもたちの小さな発想が出発です。将来の希望として、子どもたちによる自主的なごみ拾いや清掃が松本市全市に広がっていくことを願っています。

## (3) 『松商学園高等学校のボランティア遊び隊』との交流の輪

あがたの森未来サミットで小・中・高校生の仲間づくりが広がり始めた平成26年7月1日、一本の電話が本館に入りました。「館長さん、今度、うちの高校で児童館に遊びに行くからね。お願いします。」

7月9日、松商学園高等学校の有志によるボランティア遊び隊のメンバー5名が来館したのです。来館してすぐに、子どもたちと一緒にドッジボールや将棋やトランプで遊び、あっという間に交流が始まったのです。

これは、高校生が近くの小学生と触れ合うことでコミュニケーションを深めたいという願いと、本館としても地元の高校生に目を向けてもらい、関心をもってもらうこともでき、双方にとってメリットがある交流となりました。ある高校生は、「同じ地域にいながらあいさつもできない関係から、遊びをとおして少しでもコミュニケーションができればいいと思います。」と。ある高校生も、「子どもが好きなので、将来は、子どもと関われる職業につくためにも、いい勉強になります。」の声も聞かれました。今後月に1回の計画で交流を深めていきます。

こうして、高校生が遊びを計画して子どもたちと交流をすることは、互いに社会性も身につく、本館の子どもたちにとっては、「あんなお兄さんになりたい」という将来の理想像もつかめるのではないかと思います。

子ども同士の横に広がりには実に早く、単なる面(組織のつながり)ではなく、心が通い合う絆となった円になっていくものと感じます。

#### ステージ4 社会問題に目を向け始めた子どもたち

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で、原発の被害を受けた福島県飯館村の小学校児童を、毎年松本市に迎えて「子どもキャンプ」を実施している松本市教育委員会では、平成25年12月26日に本館と連携を深めている源池小学校で、その交流会を開催する計画をしていました。私自身、是非、本館の児童も参加させ貴重な機会をつくってあげたいと願いをもってました。私は、6年生の女子に、「ねえ、今度あの大震災の被災地から子どもたちが交流で源池小学校に来るけど、どうする。」とそっと聞くと、「行く、行く。交流したい。」とすぐ賛同をしてくれたのでした。

思わず私は、心の中で、「よかった。言ってみて。子どもの心は清らか」と感心したのでした。実は、私は、本館に着任して早々の4月、震災1年1ヶ月後の平成24年4月中旬に本館の子どもたちに、こんな話をしあげたことがあります。

「昨年(平成23年)の3月、宮城県の海岸でノリ業を営んでいる一家5人がいました。しかし、あの巨大な津波で仕事をしていた、大好きなおとうさん、おかあさん、そしてやさしいおじいちゃんの3人が流され亡くなってしまったのです。助かったのは、小学校3年生の女の子と迎えに来てくれたおばあちゃんの2人でした。それからは毎日、6畳の狭い仮設住宅で暮らしています。3人も亡くなり毎日が辛いことばかりです。しかし、この3年生の女の子は、「希望ノート」という大切な一冊の宝物であるノートを持っていたのでした。このノートには、こう書いてあります。『お友だちの笑顔がいつまでの見られますように。お友だちの夢が叶いますように。お友だちがいつまでも幸せでありますように。』と。本当は、自分の方がつらいはずなのに、自分のことよりお友だちのことを考えているなんて、本当

に大きな心を持った子どもだと思います。みなさんも、どうか、自分だけでなく、お友だちのことを考えて行動できる思いやりの心をもった人になってください。」と。

実は、今回の交流に参加を決めてくれた2人の女子は、後で聞くとこの話しを覚えてくれていたのでした。「子どもの豊かな心は変わらない」のです。当日は、市長さん、教育長さん、そして飯館村の小学生30名、源地小学校220名の前で、近くの公園で拾ったどんぐりで20日間かけて制作した工芸品を飯館村の小学生に贈呈したのでした。この話題は、年が明けても館内で語り尽くされていました。

#### ステージ5 まとめ

これらの様々な取り組みから、松本市では、平成26年7月31日から8月3日まで札幌市で開催された「3まち子ども交流事業 札幌市・奈井江町(北海道)・松本市の集い」に、本館の子ども1名を、松本市の代表として推薦をし、あがたの森未来サミットや子どもの権利、及び本館の連携の取り組みについて発表を通して交流を深めてきました。

北海道の子どもと交流をするのが初めての子どもたちでしたが、日頃からの様々な活動が功を奏して、自信をもって発表ができたとうれしそうでした。帰って来た後の本館での報告会でも、「今度は、北海道の子どもたちをうちに呼んで交流したい。」と積極的な意見が聞かれました。

こうして環境教育を基盤に連携した様々な実践から子どもの心が想像以上に育った実感を持ちました。

思えば、最初は雑草が生い茂った本館でした。しかし、身近な環境問題に視点に本館の清掃活動を始めたとき、そこからまちをきれいにしたい気持ちに変わり、花壇や菊作りからは花を育てることを通して市民に喜んでもらえる児童館にしたいという願いをもったこと、さらにギャラリー子どもの窓辺やあがたの森未来サミットからは、地域への誇りと責任感が芽生え、子ど

も同士や地域住民との交流へと発展しました。

これからも私は、本館を、小学生から高校生まで子どもたちの未来について語り合う『希望の学舎』として、そして子ども主体の様々な活動をとおして『子どもたちの学舎』として位置付け運営していきたいと考えています。そして、マータイ女史や国連が教えてくれた身近な環境問題を基本に、より多くの人々との連携を大切にして、子どもから保護者、地域住民に愛される児童館を、そして希望と夢のあふれる児童館を子どもと共に創り上げていきたいと思ひます。